

# 南嶺山地の同姓村

——湖南省藍山県・嘉禾県の事例——

森 勝 彦

## はじめに

村落レベルで中国集落をとらえる場合、その立地、形態、社会構造等に深く関与するのが村落を構成する氏族の存在形態である。村落と氏族との関係から同姓村と異姓雑居村<sup>1)</sup>に大別すると、一般的に華北・華中では異姓雑居村が、華南では同姓村が卓越しているといわれている。

この問題に関しては、まず福武直が戦前の実態調査に基づいて、華北では異姓雑居村が多く、華中の揚子江デルタでは同族結合は県城、鎮等の都市的集落で強く、農村では異姓雑居化が進展しているとした<sup>2)</sup>。その後の研究は地方志の統計的分析が主流であり、牧野巽が浙江省奉化県剡源郷志を利用して、合計169村の内47%を同姓村を占めるが、その戸数は全郷戸数9,000戸余りの12%にすぎず、全村の19%の割合の6姓以上の異姓雑居村が戸数では50%を占めていることを明らかにした<sup>3)</sup>。

中村哲夫は浙江省龍游県では全県1,017村の内、22.6%が古くからの有力氏族の同姓村であり、市場集落を同族支配の根拠地としていたことを指摘した<sup>4)</sup>。栗林宣夫によると福建省福州府の閩県、侯官県では、戸数の多い村落は同姓村であり異姓雑居村は小規模であるが、同姓村が全て同族とは限らず、中小氏族が改姓して有力氏族と擬制的血縁関係を結ぶ例があることが明らかとなった<sup>5)</sup>。上田信は異姓雑居村が多い華中でも、開発の時代的地域的差異により開発の担い手が異なり、ひいては村落内の社会関係、同族

結合の強弱が生じていることを浙江省奉化県忠義郷の例から指摘した<sup>6)</sup>。

以上の他に、アメリカの人類学から、フリードマン<sup>7)</sup>以来、同族の形成要因、同族支配、分化過程が、族譜や実態調査に基づいて研究されてきた<sup>8)</sup>。

以上の諸研究は、沿岸地域や河川下流域を対象地域としたものであり、商業化、都市化が比較的進展した地域の村落に関するものである。これに対し、華中・華南の河川上流域山岳地帯の村落に関しては論考がないが、これらの地帯、特に省境附近の山岳地帯は、南宋以後の平野部の開発が限界に近づいた明代の頃より、各地から移民が流入し、農民反乱<sup>9)</sup>、土壤侵食、森林破壊等様々の問題が発生した地域である<sup>10)</sup>。

本報告はこれら山岳地帯での村落規模、居住氏族、来源地、移住時期に関する事例報告であるが、対象とする藍山・嘉禾両県は揚子江中流域の湖南省南端で、広東省との省境となっている南嶺山地に位置しており、華中と華南を画する分水嶺地帯の構造を知る上でも手がかりとなり得る<sup>11)</sup>。

## I 対象地域と資料

藍山・嘉禾両県は、長沙・洞庭湖を経て揚子江に流入する湘江の一支流である春陵水の上流・水源地帯に位置し、標高1,000~1,500mの南嶺山地及びその山麓にあり、藍山県は広東省と隣接している。

使用した資料は、1933年刊の『藍山県図志』三十五巻と1938年刊の『嘉禾県図志』三十四巻である。

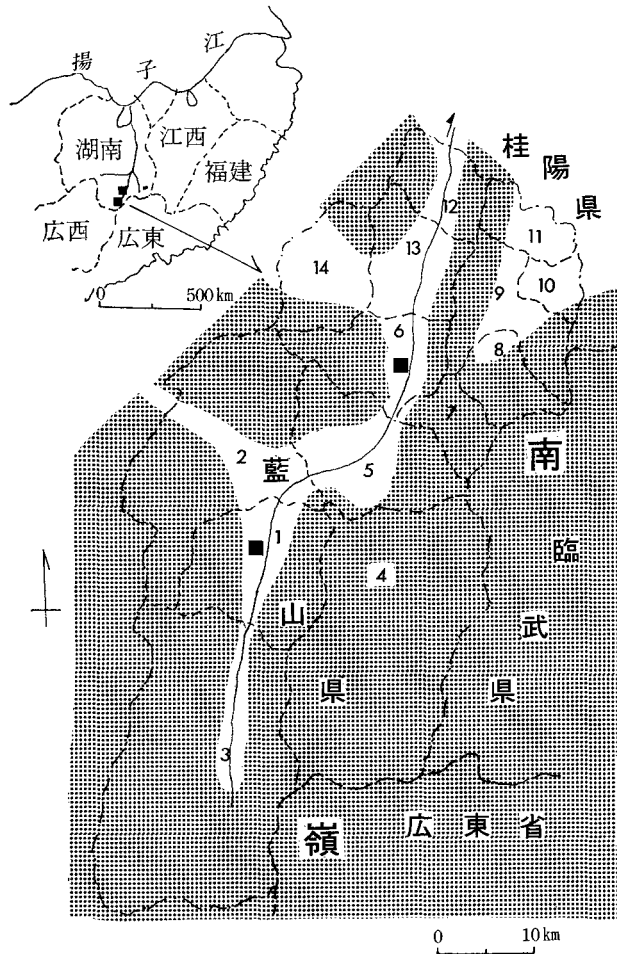


図1 地域概念図 番号は表郷区番号と対応

表1 同姓村率・一村平均戸数

図の番号	郷区名	同姓村率	一村平均戸数	氏族判明村数	氏族不明村数
藍山県	1 在大城	68.4	27.5	144	1
	2 舜	86.6	42.0	199	11
	3 鳳南	87.9	12.3	174	16
	4 感平	86.9	18.7	352	1
	5	90.0	32.0	229	14
嘉禾県	6 城平	90.9	30.8	96	8
	7 南東	85.7	49.0	42	7
	8 体田	89.9	43.3	99	1
	9	90.1	36.9	191	1
	10 永	89.8	37.7	81	0
	11 永	97.1	46.1	88	1
	12 石	91.9	48.3	59	2
	13 担	81.5	75.6	35	1
	14 広	67.8	34.2	62	0

・『藍山県図志』巻九戸籍上 附戸口総表  
 ・『嘉禾県図志』巻十一戸籍第五 城區村市戸口分表 } より作成。

表2 鳳感郷・広法区村落の戸数と姓数

鳳 感 郷	300~350	1											1	
	250~	2												
	200~													
	150~	1												
	100~	2					1							
	80~	6												
	60~	9	1	1					1					
	40~	13	1		3						1			
	30~	10	4	1	2									
	20~	23	1	1	1	2	1							
	10~	52	3	3	1	1	1					1		
	1~	194	5	1										
	戸数 \ 姓数		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
広 法 区	300~350													
	250~													
	200~	4												
	150~													
	100~	4												
	80~													
	60~						1				1			
	40~	6	1		1	1								
	30~	6	2				1							
	20~	5			1		1					1		
	10~	10	2	2	2	1	1	1	1					
	1~	16	1	4										
	戸数 \ 姓数		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

・ 出典は表1と同じ

両志ともに総編集者として嘉禾県の有力郷神の雷飛<sup>12)</sup> 鵬の指導の下に編纂された方志であり、統計表を多用した内容及びその記載順序が類似しており、同一精度・方法で編纂された方志として比較検討に値するものである。

藍山県は31,720戸、35,367人で人口密度は135.4人/km<sup>2</sup>、嘉禾県は34,171戸、35,783人、246.4人/km<sup>2</sup>で、当時の湖南省の人口密度が148.5人/km<sup>2</sup><sup>13)</sup>であることからみれば過疎とはいえないが、1816年刊の『湖南通志』記載の人口数と殆んど変化がなく、省全体では1930年代初頭になると約1,200万人増加<sup>14)</sup>していることから比べれば、人口は停滞気味である。

## II 同姓村と異姓雑居村

『藍山県図志』巻九、戸籍及び『嘉禾県図志』巻十一、戸籍には県内の村落に居住する氏族の戸口、来源地、移住時期、原領戸等が記されている。まず<sup>15)</sup> 県の下位行政区画である郷区別に同姓村率、一村平均戸数を算出した(表1)。その結果、各郷区とも同姓村率は極めて高く、最低で67.8%、最高で97.1%を示している。このような高率を示す要因は何であるか以下考えてみたい。

ここで同姓村と異姓雑居村の戸数を比較するため、同姓村率が最も低い嘉禾県広法区(図1—14)と一

表3 鳳感郷・広法区異姓雑居村の最大姓占有率

12	1										
11											
10											
9											
8	1		1	1							
7											
6			1	2	1						
5			1	2			1				
4			1		2	4	1	2			
3					2	2	1	3			
2						3	3	4	2	1	
姓数	%	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90
		~	~	~	~	~	~	~	~	~	~

・出典は表1と同じ

村平均戸数が小さい藍山鳳感郷(図1-4)を例にとってみよう。表2から両郷区に共通する点として、第一に戸数の多い村落は同姓村が多いことがあげられる。次に同姓村は戸数格差が顕著である。また、異姓雑居村については姓数、即ち居住氏族数と戸数とに相関関係はみられない。

戸数の多い同姓村についてみよう。広法区の200戸以上の同姓村4は、忠良坊(204戸)、郡頭(226戸)、楚江頭(245戸)、大塘頭(236戸)であるが、いずれも嘉禾県の大家族である季一族が分居したものである。鳳感郷の200戸以上の同姓村3の内、龍家坊(300戸)、上清函(250戸)は元代、江西省から、雷家嶺(280戸)は宋代、隣接の桂陽県からの移住であり、広法区同様有力氏族が比較的古い時期に来住したものである。

同姓村の格差は特に鳳感郷に著しく、10戸未満の村落が極めて多い。鳳感郷は南嶺山地中にあり、山間の小村が分布していたとみられる。

次に異姓雑居村についてみよう。広法区の最多戸数は広法墟(73戸)であり、鳳感郷は毛俊墟(327戸)であり、いずれも市場集落である。嘉禾県では居住氏族が判明する8の市場集落の内、7が異姓雑居であり、同様に藍山県では11の内、8が雑居である。これは設立事情と関係するとみられ、嘉禾県で

設立者が判明するの内、10が市場周辺の氏族が共同で設立したものであり、有力氏族の開発拠点とは異なった交通上の要地に立地していることからみて、集落化の過程で商人層が来住したものであろう。

広法区で異姓雑居率が高いのは比較的平地が多く、有力氏族が分居をかさねて一定地域を占有した後も、他の氏族が移住し易い条件があったこともあげられるであろう。

次に異姓雑居村について、その中で最大姓が占める割合をみよう(表3)。両郷区でも最大姓の戸数が判明するもののみとなるが、最大姓が占める割合が50%を超える村落は、43村中26村で約6割であり、2姓、3姓、4姓の村落では8割を上まわる。これらの村落では有力氏族の勢力が強く、他姓への支配も行われていたとみられるが、5姓以上の村落では最大姓が顕著な占拠率を示すことはなくなる傾向にある。

このように比較的異姓雑居率が高いところでも、同姓村に居住する傾向が強く、異姓雑居村では3~4姓で構成される村落の最大姓の同族結合、他姓への優越性はかなり顕著にみられたと思われる。数姓以上の異姓雑居村では、姓数に比例して戸数が増加する例は殆んどみられず、中小氏族が勢力均衡の状態で雑居する例が多かったと考えられる。

### III 来源地と移住時期

表4 氏族の来源地

来源地	藍山	嘉禾
郷	343	501
県	145	146
旧桂陽州	163	87
湖南省	385	39
広東省	45	0
広西省	18	0
江蘇省	117	27
その他	23	4
計	1,239	804
不明	172	82
総計	1,411	886

- ・旧桂陽州とは桂陽・臨武・嘉禾・藍山の各県。
- ・出典は表1と同じ。

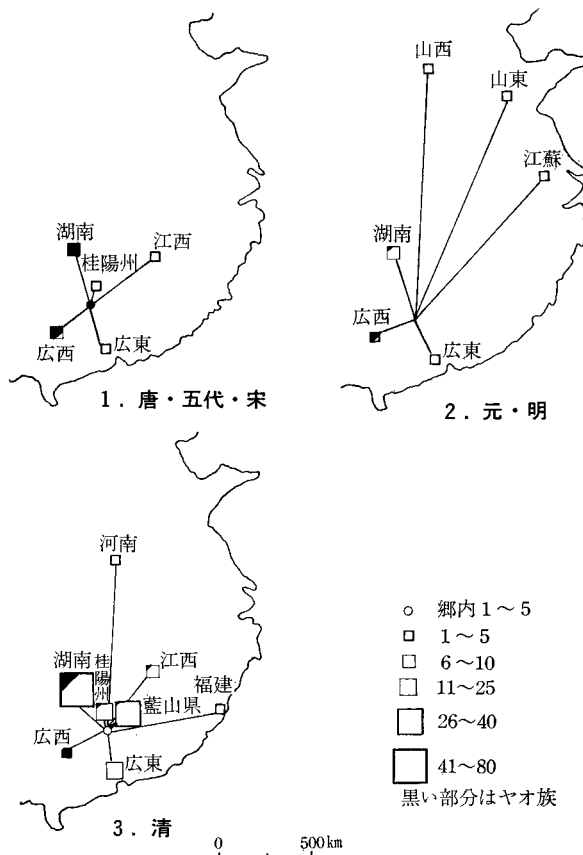


図2 藍山県舜郷の時代別氏族来源地  
各省の来源地点は、湖南省を除き便宜上省都とした。

ここで氏族の来源地をみると(表4)、嘉禾県と藍山県では明確な相異点がみられる。前者が区内から62.3%、区内から18.2%であるのに対し、後者は郷内から27.7%、区内からは11.7%であり、嘉禾県では氏族の県内での分居化が極めて進展していたのに対し、藍山県では県内での分居化より、県外で特に湖南省各地からの移住が多い。省外では江西省が多いが、これは湖南省全域に共通するとみられる。<sup>18)</sup>

次に、どのような理由あるいは生業で移住してきたかについては大部分が判明しないが、断片的に得られる資料によると、(1)官僚として赴任しそのまま残ったもの、(2)平蛮武官、(3)戦乱を避けてきたもの、(4)商人、(5)農民があげられる。県城や戸数の多い同姓村に居住する有力氏族は(1)や(2)の例が多く、来源地は江西省の他に

山西省、山東省等の遠隔地が多い。(2)は後述するように、湖南省はかつてヤオ族の原住地で漢族の南下・移住とともに反乱が頻発したため、その鎮定のために武官として一族を連れて来住したものである。(3)は華中・華南への漢族の移住の最も典型的なものである。(4)は商人専業ではなく半農半商のような形態であったのではなからうか。(5)は山間の小村の氏族で、貧窮によって来源地を離脱せざるを得なかったものであろう。

移住時期については不明な氏族が多いが、戸数の多い同姓村については比較的判明する。それらは宋、元代に移住し、その子孫・一族が分居をかさねる有力氏族が多いが、最初から同姓村を形成していたケースばかりではない。嘉禾県では胡氏の宅(424戸)は「初居有蕭劉二姓今亡」とあり、劉氏の黄甲

表5 藍山県舜郷の氏族来源地移住時期

時 期	郷	県	旧桂陽州	湖南省	広東省	広西省	江西省	その他	計	来源地不明
唐五代(618/960)	1(1)		1		1(1)	2(2)	2		7	
宋			1	8(8)		4(2)			13	1
元									0	
明				8(1)	3	3(2)		4	18	
清前半	3	23	8	33	24		6	2	99	1
清後半	1	12	3	22(1)	1		1		40	
(清)	1	2(1)	1(1)	20(9)		2(2)	2(1)		28	
民 国									0	
計	6	37	14	91	29	11	11	7	205	
時期不明	1	4	2	9	3					

- ・ ( ) はヤオ族。『藍山県図志』巻十四礼俗篇第五之四條地表記載のヤオ族姓，巻十條地表記載のヤオ族村落よりヤオ族と判断。
- ・ 出典は表1と同じ。

頭(286戸)は「初居黄姓甲長之地，因以名村，黄姓今亡」とあるように，最初は他の姓もいたが，その氏族の消失により同姓村となった例である。同様に異姓雑居村も，単姓であった村落に他の氏族が来住した結果，雑居化したものであろう。が，19世紀初頭からの人口停滞が示す通り，両県とも開発限界に達し，新たな氏族の移住が少なくなったことが，この地域が異姓雑居村が少ない要因の一つとみられる。

両県の郷区の中で氏族の移住時期・来源地ともに判明する地域は少ないが，その中で藍山県舜郷(図1-3)は比較的両者ともデータが得られる。表5のようにこの地域への移住は唐代から開始されているが，宋代までの移住氏族の内，2/3がヤオ族である。ヤオ族は湖南省の洞庭湖周辺に居住していたが，漢族の南下とともに居住地を追われ南嶺山地に移り，一派は広西，雲南，北部タイへ，もう一派は福建，<sup>19)</sup> 浙江の山地へとさらに移っていく，

その移動の過程でヤオ族は度々反乱を起こしている。藍山県では，南嶺を越えた広東省連県や広西省のヤオ族と連動したものや，漢族の土匪や砂賊(鉞

夫)と共に起こした例もある。<sup>20)</sup> 藍山県では舜郷の盆地に1396年，砦を築いて漢族進出の拠点としているが，表からも明らかなように明代から漢族の移住が進展し始める。が，ヤオ族の不穏な情勢は続き，その反乱⇄平定によって，14世紀末の県内28里の編成が，17世紀末までに28→15→18→21→18→14→25と変化している。<sup>21)</sup>

したがってこの地域への漢族の移住は，ヤオ族の平定・漢化と関連がある。<sup>22)</sup> 同姓村の卓越にも，ヤオ族に対する防衛の必要性が，同族結合を強化させた結果が反映されているとみられる。

## おわりに

他の地域の場合と比較すると，浙江省奉化県剡源<sup>23)</sup> 郷，龍游県に比べ，藍山・嘉禾両県は同姓村率が極めて高く，しかも住民の大多数が同姓村に居住している。この状況は福建省閩県，侯官県に類似している。<sup>25)</sup> その点では華南型といえるかもしれないが，閩県，侯官県は福建開発の拠点であり戸口も多いことから，3,000戸余りにのぼる同姓村がみられ，村落規模が

大きい。又、藍山、嘉禾両県からは清代、進士を1名づつしか出していないが、閩県、侯官県では主な氏族からでも180名を越える。これは開発拠点地域と省境山岳地域のようなフロンティアとの差を示している。

両地域の差を示すものとして、さらに同族結合・支配の中心地が、都市化、商業化が進んだ開発拠点地域では県城や市場集落のような経済的中心地にあるのに対して、藍山、嘉禾県では生産・防衛の本拠地である村落にあることがあげられる。しかし同族結合、同族を越えた社会関係の問題は宗祠、分祠の管理運営、土地集積、族田運営、土地廟の管理等からより詳細に論じる必要がある。本報告では資料的限界により言及できなかったので、他地域での検討課題としたい。<sup>27)</sup> (筑波大学・院)

本稿作成にあたり筑波大学黒崎千晴教授に御指導・御助言頂きました。記して感謝の意を表します。

#### [注]

- 1) 同姓であるからといって同族とは限らない。異姓雑居とは、ここでは2姓以上の氏族が居住する全ての村落を指す。
- 2) 福武直『中国農村の構造』大雅堂、1946。
- 3) 牧野巽「中国に於ける宗族の村落分布に関する統計的一資料—剡源郷志について—」(同『近世中国宗族研究』日光書院、1949)
- 4) 中村哲夫「浙江省龍游県における同姓村の分布について」(『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』朋友書店、1979。同『近代中国社会史研究序説』法律文化社、1984に所収。)
- 5) 栗林宣夫「清代福州地方における集落と氏族」立正史学39、1975。
- 6) 上田信「地域の履歴—浙江省奉化県忠義郷—」社会経済史学49—2、1983。
- 7) Freedman, M.: *Lineage Organization in Southeastern China*, Althone Press, 1958. *Chinese Lineage and Society Fukien and Kuangtung*, Althone Press, 1966.
- 8) Pasternak, B.: *The Role of Frontier in Chinese Lineage Development*, *Journal of Asian Studies*, 28—3, 1969. Woon, Y.: *The No-Localized Decent Group in Traditional China*, *Ethnology*, 18, 1979. Watson, R.: *The Creation of a Chinese Lineage*, *Modern Asian Studies*, 1982.
- 9) 谷口規矩雄「明代中期荆襄地帯農民反乱の一面」, 研究35, 1965。
- 10) 千葉徳爾「中国中南部の土壌侵蝕と農耕文化」歴史地理学紀要15, 1973。
- 11) スキナーは中国を大分水嶺によって8大地域に区分し、人口密度を総合指標として core と Periphery に分け、都市化、市場組織、農業経営、社会移動等を考察する方法を提唱している。Skinner, G. W.: *Cities and the Hierarchy of Local Systems* (Skinner, (ed.): *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1977, PP. 281~288)
- 12) 『嘉禾県図志』巻二十七、附科名表によると、1893年挙人となり、巻二十三、選挙によると1922年省議會議員に選ばれている。
- 13), 14) は1933年刊『湖南年鑑』記載の人口。『湖南省志』第二巻、地理志、上册修訂本、湖南人民出版社、1982、239頁に所収。
- 15) 藍山県では郷、嘉禾県では区。
- 16) 嘉禾県城885戸の内、85.3%を占め、同族である。
- 17) 『嘉禾県志』巻十八、食貨篇第九下。
- 18) 譚其驥「中国内地移民史—湖南篇—」史学年報4、1932。
- 19) ヤオ族の総合的研究に、竹村卓二『ヤオ族の歴史と文化』弘文堂、1981がある。
- 20) 『藍山県図志』巻六、事紀。
- 21) 『藍山県図志』巻十、戸籍上。
- 22) 『藍山県図志』巻十四、礼俗篇第五之四、徭俗によると、ヤオ族には過山、高山、平地の区分があり、平地ヤオは山麓に降り「買田供税、列宅如平民」とあり、学校を建立し漢族と通婚関係を持つようになっている。高地ヤオは深山に定住し薪炭・雑量を市で売り、塩・魚肉を購入しており、過山ヤオは焼畑移動耕作を行なっている。ヤオ族の居住地帯は森林資源が豊かであり、生態学的「棲み分け」(前掲19頁)を漢族と行なっていた。

- 23) 前掲3)
- 24) 前掲4)
- 25) 前掲5)
- 26) 華南村落の特色を整理したものに、瀬川昌久「村のかたち—華南村落の特色—」民族学研究47—1, 1982がある。
- 27) 湖南省臨湘県の自衛組織の本部は、原則として有力氏族の本拠地にあり、それは市場集落とは必ずしも一致していない。(Kuhn, A. P.: *Rebellion and Its Enemies in Late Imperial China*, Harvard University Press, 1970, PP. 82~87)
- 28) スキナーは、同族結合の地域的範囲を基本市場圏内とした(中村哲夫他訳『中国農村の市場・社会構造』法律文化社, 1979, 52頁。)が、それを越える場合が多いことをフリードマン(前掲7, 1966, P. 92), ウーン(前掲8, PP. 27~28)が指摘している。スキナー自身は固定的イメージを与える「市場共同体」の概念を修正し、中国農村社会を王朝盛衰と関連させ、開放と閉鎖のサイクルでとらえ、商品経済化, 自衛組織化, 社会移動化をそ

の枠組で説明しようとした。だが変動サイクルとして王朝単位は長すぎるし、集落形態によってもサイクルの空間的規模が異なると思われる。(Skinner, G. W.: *Chinese Peasants and the Closed Community; Open and Shut Case*, *Comparative Studies in Society and History* 13—3, 1971)

- 29) 栗川宣夫が指摘した(前掲3)擬制的同族集落については資料的に確認できなかったが、同様の事例については、1936年刊広西省『來賓県志』上篇、氏族に、「韋氏……郷民非韋氏者每遭其虐。是以多昌姓韋。雷氏霍氏皆從韋姓。今忠義団之上蘭韋氏, 実霍氏也。他類此者或亦不一而足。」とあるように、有力氏族の姓を名乗る中小氏族の存在が、華南における同姓村の卓越の一要因であることは確実であろう。

また、本稿で論じられなかった漢族とヤオ族の交渉関係, 市場組織, 原領戸については別稿で報告したい。